

名古屋オリンピックの虚像と悲惨

表題は水田洋『時流と風土』御茶の水書房、1985年に所収されている論文である。これは先生が『エコノミスト』1981年の4月14日、10月27日に寄稿されたものだ。先日、京都で水田洋先生、宮本憲一先生と話していて、オリンピックが話題になった。原発事故の深刻な被害が続き、そして今回の熊本など巨大災害に見舞われている日本。こんな状況で2020年に東京オリンピックを開催し、お祭り騒ぎしていてよいのか。

今から35年前の名古屋オリンピック騒動が思い起こされる。写真は中日新聞縮刷版1981年10月1日1面。「予想外の25票差」とある。

はたして「予想外」だったのか。水田論文は次の言葉から始まる。ひとつの妖怪が名古屋に出没している。

「1988年名古屋オリンピック」という名の妖怪である。

オリンピックをめぐる三大幻想として、国際交流幻想、スポーツ振興幻想、経済効果幻想をあげる。「福祉の本山」として再選された革新市長が、「オリンピックの本山」に変身したのは、国際交流幻想がもっとも強い。国際都市といえば、人的物的知的な国際交流の場所のことであろうが、そのためにまず必要なことは、都市生活の充実であって、それが充実してくれば、国際化はむしろ自然についてくる。オリンピック開催の20日間のお祭り騒ぎでできることではない。



1981年9月30日の午後4時に、国際オリンピック委員会（IOC）が、1988年の夏季オリンピックの開催地を決定し発表することになっていたのも、われわれは、会場であるバーデンバーデンのクワハウスの入り口近くで、名古屋開催に反対するパネルの展示をやっていた。発表が予定より早くなるらしいという情報はいり、ぼくが階段下の人ごみのなかにまぎれこんでから、数分もたたないうちに、あっけなくことは終わってしまった。

その瞬間、反対運動は勝った、あと7年間の苦勞から解放されたと思い、また、いっしょに運動をやってきた大学院の連中が、研究の時間ができたことを喜んでいるだろう（あるいは、論文がかけない言い訳に反オリンピックを使えなくなって、こまっているだろう）と思ったが、たちまち、ではソウルでいいのかという、重苦しい疑問が、胸につかえるようにおこってきた。

(2016年4月22日)